我が国における競泳種目の強化体制に関する研究

トップスポーツマネジメント
5008A328-9　平井伯昌　　研究指導教員：　平田竹男教授

本論文は、現在の日本競泳界の環境を踏まえた上で、日本競泳界の強化体制の課題を検証し、オリンピックや世界選手権に出場しメダル獲得を目指すトップレベル選手の強化・育成体制について考察を行い、今後考えられる新たなメダリストを輩出する強化体制を提案することを研究の目的とする。

第2章では、著者が2000年以降、競泳代表チームのスタッフとして関わってきた経験から日本競泳界を取り巻く環境の変化を述べている。現在、日本の水泳界においては、オリンピックや世界選手権でメダルを獲得するという結果を出してはいる。しかしながら、水泳界を取り巻く環境は世界的に常に変化をとげ各国とも、水泳に限定した技術力のみならず、マネジメント力の強化が図られている。こうした外部環境に対応し、本質的に強い選手を育ててゆくためには水泳の技術向上のみならず、バイオメカニクス・運動生理学・ウェイトトレーニング・理学療法士・鍼灸士といった多分野サポート体制をしいた上で、更に全体をマネジメントしてゆく組織づくりとその運営が求められている。

このような変化を踏まえて、今後、日本競泳界がさらなる発展を収めるためには、どのような点を改善すべきか。それを明らかにするために、現状の競泳代表選手の主な強化体制である、スポーツメーカー、大学（大学院）、スイミングクラブ、プロのコーチ、選手など関係者に対してインタビュー調査を行った。3 章では、それらの手法を述べている。

4 章では、分析の結果として、日本の主な強化体制である、スポーツメーカー・大学（大学院）・スイミングクラブ・プロ体制といった 4 つの体制が、各々問題点があることが明らかになった。各強化体制における問題点は以下の通りである。

スポーツメーカーの強化体制は、練習環境面では十分であると考えられるが、パフォーマンスに直接関係のある用具選択の自由度の問題がある。

大学（大学院）チームも練習環境には不十分はないが、コーチが常時トレーニングの現場に出にくいことや、在籍年数の制限があること、トップ選手への指導に特化しにくいことといった問題点がある。

スイミングクラブは、トップ選手への特化はしやすいものの、トレーニング環境やトレーニング時間帯に制限を有することが多いとのことである。また、所属先・選手の金銭的負担が増大している点も問題であるとのことである。

プロ体制はコーチ・スタッフを含めたトレーニング環境は十分であり、金銭的にも潤沢である。マネジメント面も整っており、4 つの強化体制では一番理想に近い。しかし、プロ選手には世界選手権・オリンピックでメダルを獲得したレベルの高い選手でなくてはなることができない。そのため、記録レベルが高くても、成績を出せていない選手、若手の選手はプロ体制を進めていくことは困難である。

5 章では、以上の結果を踏まえた考察を述べている。現状における日本競泳の強化体制はそれぞれに問題を抱えていると言え、新たな強化体制が必要ではないかと考えられる。オリンピックや世界大会などで成功を収めているアメリカの強化体制を参考にすると、「The Race Club」というチームがある。参加資格は世界ランキング上位選手に限られ、世界中から競泳のスプリンターが集まりトレーニングを共にしている。「The Race Club」の大きな特徴は、選手の移籍を伴わず、練習参加費用を負担することで、世界トップレベルのコーチングを受けられることである。

このような事例を参考として、　日本でも、所属の移籍を伴わない「The Race Club」のようなチームを、トップコーチが中心となって構成することによって、現状の強化体制の問題である、上記のような問題を克服することができるのではないかと考える。そして、トップ選手育成を目的としたレースクラブといった新たな体制づくりを行う

ことが今後のメダリスト輩出には必須といえる。

ここで今一度、筆者なりになぜメダリスト獲得に情熱を注いでいるのか、またそのための強化体制が必要であるのかということを述べることとするが、筆者のコーチとしての経験から、優秀な才能を持った人間は、その才能を開花させる権利を持ち、その才能を認知したコーチは開花させる義務があると考えるからである。そして、競泳という忍耐力と克己心が必要な競技が発展し、オリンピックで金メダルを獲得することで、日本国民に夢と希望を与えると同時に、努力をする大切さを感じてもらうことが、青少年の健全な人間育成をもたらすと考えるからである。

筆者は、本論文で提言した施策が実施されることを通じて、将来更に水泳が普及し、オリンピックで常に金メダリストが輩出できるようになることを望んでおり、本論文がその一翼を担えれば幸いである。